

保育士を対象とした紙芝居研修会の実施とその効果の分析

渡 邊 裕・前 徳 明 子・正 司 顯 好

Analysis of the Effects on Workshops about Kamishibai for Nursery Teachers

WATANABE Hiroshi, MAETOKU Akiko, SHOSU Akiyoshi

キーワード：紙芝居、特性理解、保育士、現職研修会

1. はじめに

紙芝居や絵本は、幼児が言葉を獲得していく過程において欠かすことのできない児童文化財である¹⁾。保育士は紙芝居や絵本の特性や違いを理解した上で子どもたちに教育的な作品を提供することが重要である。しかし、多忙な保育現場においては、紙芝居の特性が十分に理解されないまま活用されていることが指摘されている（鬢櫛・野崎 2010、野崎ほか 2010、正司 2015 等）。

まつい（1998）によれば、紙芝居の「特性」は紙芝居ならではの「形式」によって作り出される。紙芝居の「形式」とは、「画面をぬく」「ぬいた画面を差し込む」「演技手と観客が向かい合う」という紙芝居を演じる際に必要とされる行為であり、この「形式」は紙芝居の「舞台」を用いることでいっそう活かされる²⁾。大元（2013）が指摘するように、舞台の使用は紙芝居の本質である演劇性や大衆性と関係しているとも考えられる³⁾。しかし、保育の現場において紙芝居の際にいつも舞台を使用している幼稚園や保育園は非常に少ないのが現状である（鬢櫛・野崎 2010、正司 2015、正司・渡邊 2017 等）。

こうした状況を改善するための方法として、現職保育士を対象とした紙芝居研修会を開催し、紙芝居の特性理解を高めるための機会を提供していくことが考えられる。正司・渡邊（2017）は、新

人保育士と保育所長を対象とした紙芝居研修会の実践を通して行ったアンケート調査を分析し、紙芝居に対する考え方の相違を明らかにした。しかし、この調査では研修会実施の効果を測定することはできなかった。

本研究では、年齢層と勤続年数の異なる3回の保育士対象研修会を実施し、事前事後アンケート調査とその分析を通して、保育士の紙芝居実践状況と事前理解についてより詳しい調査を行うと共に、研修会の実施前と実施後の紙芝居に対する意識の変容を分析することで研修会実施の効果と課題について考察することが目的である。

2. 研究の方法

2.1. 研修会の実施

2016年から2017年にかけて埼玉県内の保育士を対象に行われた3回の紙芝居研修会の実施状況を以下に示す。講師はいずれも埼玉東萌短期大学幼児保育学科の正司顯好、前徳明子、渡邊裕が担当した。

(1) 第1回研修会

主催：社会福祉法人光輪会なかよしこども園

日時：2016年12月20日

14時～15時30分（90分間）

対象者：なかよしこども園に勤務する

保育士 41名

場所：なかよしこども園（埼玉県所沢市）

(2) 第2回研修会

主催：埼玉県幼保一体化園研究会

日時：2017年1月21日

14時～15時30分(90分間)

対象者：埼玉県私立保育園連盟に加盟する

新人保育士 69名

場所：春日部市教育センター視聴覚ホール

作：古田足日、絵：田畑精一

②「100万回生きたねこ」

作・絵：佐野洋子

(3) 第3回研修会

主催：埼玉県幼保一体化園研究会

日時：2017年10月18日

14時～16時30分(90分間)

対象者：埼玉県越谷市内に勤務する

保育士 51名

場所：越谷市中央市民会館

2.2. 研修会のテーマと内容

紙芝居研修会の共通テーマとその内容、使用した紙芝居と絵本を以下に示す。

(1) 共通テーマ

「子どもたちが言葉を獲得していく過程における紙芝居の役割について」

(2) 内容

- ①絵本と紙芝居の形式と特性の違い
- ②観客型参加と物語完結型の紙芝居
- ③紙芝居の作品理解と実践の基本
- ④舞台を使って紙芝居を演じることの基本
- ⑤保育現場におけるおすすめ紙芝居

(3) 実演に使った紙芝居

紙芝居①「こぶたのけんか」

作：高橋五山、絵：赤坂三好

紙芝居②「おおきくおおきくおおきくなあれ」

作・絵：まつのりこ

紙芝居③「ひよこちゃん」

原作：チョコフスキー

脚本：小林純一、絵：二俣英五郎

紙芝居④「くらべっこくらべっこ」

作・絵：まえとくあきこ

(4) 読み語りに使った絵本

①「おいしいのぼうけん」

2.3. 調査方法

研修会の効果を調べるために、それぞれの研修会前と研修会後に現地にて同じ質問紙を配布し、回答は自由意志によるものであること、結果を集計して報告書にまとめることについて説明した上で無記名式のアンケート調査を実施した。事前調査の質問項目は、「A 受講生の属性に関する質問」、「B 紙芝居の実践経験に関する経験」、「C 紙芝居の意識に関する質問」で構成し、5分程度で回答してもらった。事後アンケート調査の質問項目は、「C 紙芝居の意識に関する質問」で構成し、5分程度で回答してもらった。Cの調査は、研修会前後の効果を測定するために同じ質問内容で事前調査と事後調査の2回実施した。

A～Cの調査については、第1回研修会では30名、第2回研修会では69名、第3回研修会では51名の有効回答を得た。各項目の質問内容詳細は以下の通りである。

A 研修会受講者の属性に関する質問(事前調査)

年齢(「1. 10代」「2. 20代」「3. 30代」「4. 40代」「5. 50代」「6. 60代以上」の6択)、勤続年数(「1年未満」「1年以上3年未満」「3年以上10年未満」「10年以上20年未満」「20年以上30年未満」「30年以上」の6択)、勤務形態(「常勤保育士」「非常勤保育士」「常勤事務員」「非常勤事務員」「その他」の5択)について調査した。

B 紙芝居の実践状況と事前理解に関する質問(事前調査)

「紙芝居の実演経験(1問)」、「紙芝居の学習経験(2問)」、「紙芝居舞台の使用(3問)」、「紙芝居と絵本の区別(1問)」、「紙芝居の利用状況(1問)」という5つのカテゴリで8項目の質問について、2件法(1. はい、2. いいえ)で実施した。

C 紙芝居に対する意識に関する質問（事前調査）

「保育活動に紙芝居を用いることへの関心（2問）」、「保育活動に紙芝居を用いることへの意欲（2問）」、「紙芝居の有用性（2問）」、「紙芝居の特性についての理解（3問）」、「紙芝居学習への意欲（3問）」という5つのカテゴリで計12項目の質問について、4件法（1. そう思わない、2. あまりそう思わない、3. ややそう思う、4. そう思う）で実施した。

2.4. 分析方法

「A 研修会受講者の属性に関する質問（事前調査）」については度数分布を求めた。「B 紙芝居の実践状況と事前理解に関する質問（事前調査）」については、肯定的回答数（はい）と否定的回答数（いいえ）の割合を求め、その偏りを調べるために、正確二項検定による直接確率計算（両側検定）を行った。

「C 紙芝居に対する意識に関する質問」については、「そう思わない」を1、「あまりそう思わない」を2、「ややそう思う」を3、「そう思う」を4として平均値を算出し、各質問項目について対応のある t 検定を実施した。

3. 結果

3.1. 研修会受講者の属性

表1に研修会受講者の年齢構成を示す。3回の研修会とも20代から50代までの受講者であり、10代と60代以上はいなかった。第1回、第2回研修会では20代が最も多く、30代がその次に多かった。一方で第3回研修会では40代が最も多く、次に多いのが30代であった。

表2に研修会受講者の勤続年数を示す。いずれの研修会でも受講者の勤続年数は1年未満から20年以上まで幅広く分布しているが、最も多いのは2～3年であった。

表3に研修会受講者の勤務形態を示す。いずれの研修会でも常勤保育士が最も多いが、第2回では3名、第3回では13名の非常勤保育士が含まれていた。

表1、表2の結果から、第1回研修会の受講者は20代の勤続年数2～3年といった比較的若くて経験の浅い保育士、第2回では20代～30代の勤続年数2～20年という中堅クラスの保育士、そして第3回では30代～40代で勤続年数2～3年という比較的年齢は高いが経験の浅い保育士が

表1 研修会受講者の年齢構成

研修会	有効回答数	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
第1回	30	0	22	4	2	2	0
第2回	69	0	38	17	8	6	0
第3回	51	0	13	15	16	7	0

表2 研修会受講者の勤続年数

研修会	有効回答数	1年未満	1～2年	2～3年	3年～20年	20～30年	30年以上
第1回	30	3	8	13	5	1	0
第2回	69	6	14	24	21	3	1
第3回	51	5	14	16	9	4	3

表3 研修会受講者の勤務形態

研修会	有効回答数	常勤保育士	非常勤保育士	常勤事務員	非常勤事務員	その他
第1回	30	28	0	1	0	1
第2回	69	65	3	0	0	1
第3回	51	34	13	0	0	4

多いという特徴を見ることができる。

3.2. 紙芝居の実践状況と事前理解についての調査結果

表4に紙芝居の実践状況と事前理解についての調査で実施したカテゴリ、質問番号、質問項目を示す。また表5に各研修会における回答数、肯定的回答数、否定的回答数、肯定的回答率、および有意確率（両側検定）の調査結果を示す。なお、全ての質問項目で肯定的回答数と否定的回答数のうち多かった方のセルをグレーで示した。

紙芝居の実演経験について質問したB1の結果によると、3回の研修会とも肯定的回答率が80%以上であり、肯定的な回答が否定的な回答よりも有意に多かった。

紙芝居の学習経験については、学生時代に演じ方およびその特性について学んだ経験のあるかどうかを質問したB2の結果によると、3回の研修会とも肯定的回答率は60%以上であり、第2回、

第3回研修会では肯定的回答数が否定的回答数よりも有意に多かったが、第1回研修会では有意な差は認められなかった。また社会人になってから紙芝居の演じ方およびその特性について学んだ経験のあるかどうかを質問したB3の結果によると、3回の研修会とも肯定的回答率は50%以下であり、第1回研修会では否定的回答数が肯定的回答数よりも多く、有意傾向が見られ、第3回研修会では否定的回答数が肯定的回答数よりも有意に多かった。第2回研修会では有意な差は認められなかった。

舞台の使用については、紙芝居を演じるときに舞台を使って演じたことがあるかどうかを質問したB4の結果によると、肯定的回答率は36%以下であり、いずれも否定的回答数が肯定的回答数よりも多く、第1回研修会では有意傾向、第2回、第3回研修会では有意な差が認められた。保育の中で紙芝居を演じるときには、専用の「舞台」を使用しているかどうかを質問したB5の結果によ

表4 紙芝居の実践状況と事前理解についての質問項目

カテゴリ	質問番号	質問項目
紙芝居の実演経験	B1	これまでに紙芝居を演じたことがありますか
紙芝居の学習経験	B2	学生時代に紙芝居の演じ方およびその特性について学びましたか
	B3	社会人になってから紙芝居の演じ方およびその特性について学びましたか
舞台の使用	B4	これまで紙芝居を演じるときに舞台を使って演じたことがありますか
	B5	保育の中で紙芝居を演じるときには、専用の「舞台」を使用していますか
	B6	現在の職場には紙芝居の舞台がありますか
紙芝居と絵本の区別	B7	紙芝居と絵本をこれまでの保育の中で区別して使用していましたか
紙芝居の利用状況	B8	現在、保育現場で子どもの教材として「絵本」よりも「紙芝居」の方を選んで使用することの方が多いですか

表5 紙芝居の実践状況と事前理解についての調査結果

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

カテゴリ	質問番号	第1回研修会					第2回研修会					第3回研修会				
		回答数	肯定的回答数	否定的回答数	肯定的回答率	出現確率 (両側検定)	回答数	肯定的回答数	否定的回答数	肯定的回答率	出現確率 (両側検定)	回答数	肯定的回答数	否定的回答数	肯定的回答率	出現確率 (両側検定)
紙芝居の実演経験	B1	30	24	6	80.0%	0.000 **	69	62	7	89.9%	0.000 **	51	47	4	92.2%	0.000 **
紙芝居の学習経験	B2	30	18	12	60.0%	0.362 <i>n.s.</i>	69	51	18	73.9%	0.000 **	51	39	12	76.5%	0.000 **
	B3	30	10	20	33.3%	0.098 †	69	34	35	49.3%	1.000 <i>n.s.</i>	51	14	37	27.5%	0.000 **
舞台の使用	B4	24	7	17	29.2%	0.064 †	59	21	38	35.6%	0.036 *	47	14	33	29.8%	0.008 **
	B5	30	1	29	3.3%	0.000 **	69	9	60	13.0%	0.000 **	51	5	46	9.8%	0.000 **
	B6	30	21	9	70.0%	0.042 *	68	21	47	30.9%	0.000 **	51	27	24	52.9%	0.780 <i>n.s.</i>
紙芝居と絵本の区別	B7	30	18	12	60.0%	0.362 <i>n.s.</i>	69	43	26	62.3%	0.054 †	51	39	12	76.5%	0.000 **
紙芝居の利用状況	B8	30	5	25	16.7%	0.000 *	69	6	63	8.7%	0.000 **	51	15	36	29.4%	0.006 **

ると、肯定的回答率は13%以下であり、いずれも否定的回答数が肯定的回答数よりも多く、すべての研修会で有意な差が認められた。また現在の職場には紙芝居の舞台があるかどうかを質問したB6の結果では、第1回研修会では肯定的回答率が70.0%であり、肯定的回答数が否定的回答数よりも有意に多かった。しかし第2回研修会では肯定的回答率が30.9%であり、否定的回答数が肯定的回答数よりも有意に多かった。また第3回研修会では肯定的回答率が52.9%であったが、肯定的回答数と否定的回答数の間には有意な差は認められなかった。

紙芝居と絵本の区別について質問したB7の結果によると、3回の研修会とも肯定的回答率が60%以上であり、第2回、第3回研修会では肯定的回答数が否定的回答数よりも有意に多かったが、第1回研修会では有意な差は認められなかった。

紙芝居の利用状況について質問したB8の結果によると、3回の研修会とも肯定的回答率が30%以下であり、いずれの研修会でも否定的回答数が肯定的回答数よりも有意に多かった。保育の現場においては、教材として紙芝居よりも絵本の方が選ばれることが多いことが分かる。

3.3. 研修会実施前後の紙芝居に対する意識についての調査結果

表6に紙芝居に対する意識についての調査で実施したカテゴリ、質問番号、質問項目を示す。また図1～図3に第1回研修会～第3回研修会における紙芝居に対する意識についての事前調査および事後調査の結果を示す。グラフの上の数値は各質問項目の平均値であり、また事前調査と事後調査の平均値に有意な差が認められた質問項目には記号を付している。

第1回研修会の結果によると、質問番号C1 ($t(29) = 2.97, p < .01$)、C7 ($t(29) = 6.02, p < .01$)、C8 ($t(29) = 7.41, p < .01$)、C9 ($t(29) = 8.65, p < .01$)、C10 ($t(29) = 6.73, p < .01$)、C11 ($t(29) = 2.54, p < .05$)、C12 ($t(29) = 2.41, p < .05$)において平均値に有意な差が認められ、いずれも事前調査よりも事後調査の値が高くなった。C2 ($t(29) = 1.72, p < .10$)は有意傾向であり、事前調査よりも事後調査の値が高くなった。質問番号C3 ($t(29) = 1.00, n.s.$)、C4 ($t(29) = 1.44, n.s.$)、C5 ($t(29) = 1.14, n.s.$)、C6 ($t(29) = -1.00, n.s.$)については平均値に有意な差は認められなかった。

第2回研修会の結果によると、質問番号C1 ($t(68) = 3.20, p < .01$)、C2 ($t(68) = 2.95, p < .01$)、C4 ($t(68) = 2.13, p < .05$)、C6 ($t(68) = 2.90, p < .01$)、C7 ($t(68) = 5.10, p <$

表6 紙芝居に対する意識についての質問項目

カテゴリ	質問番号	質問項目
保育活動に紙芝居を用いることへの関心	C1	紙芝居を用いた保育活動に興味がある
	C2	紙芝居を保護者参加の保育活動で使っていくことに関心がある
保育活動に紙芝居を用いることへの意欲	C3	紙芝居をこれからの保育に役立てたい
	C4	紙芝居を毎月のお誕生会に役立てたい
紙芝居の有用性	C5	子どもが言葉を獲得するために紙芝居は役立つ
	C6	子どもが言葉によって心をはぐくむために紙芝居は役立つ
	C7	紙芝居は絵本よりも協同保育に向いている
紙芝居の特性についての理解	C8	紙芝居の形式と特性について理解している
	C9	紙芝居と絵本の特性の違いについて理解している
	C10	紙芝居の基本的な演じ方について学んだ
紙芝居学習への意欲	C11	紙芝居の講習会にもっと参加してみたい
	C12	さらに紙芝居の演じ方について個人的に学んでみたい

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

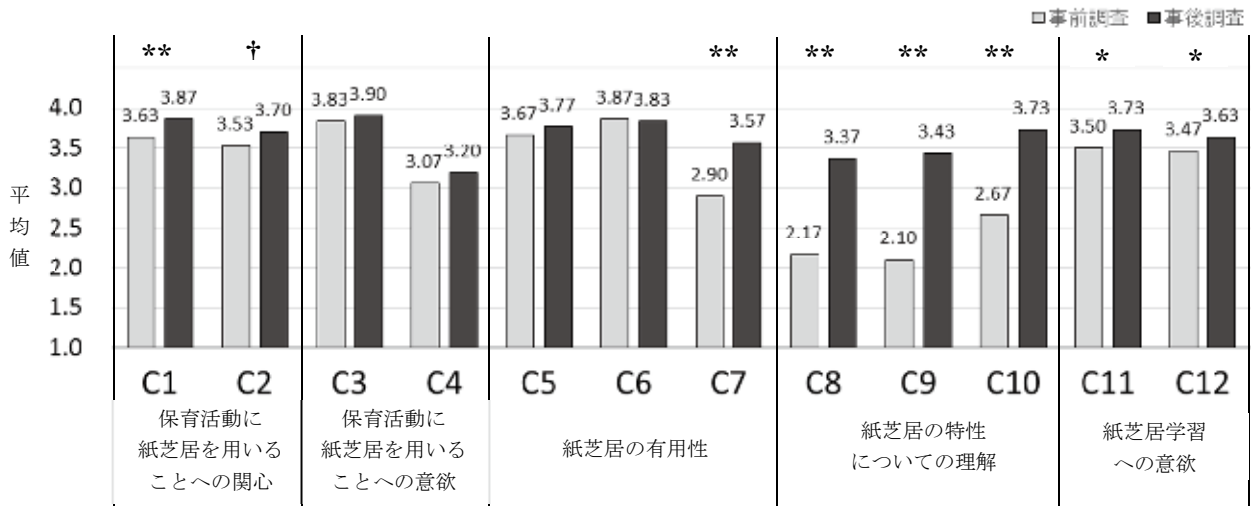


図1 第1回研修会における紙芝居に対する意識についての事前調査および事後調査結果 (N = 30)

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

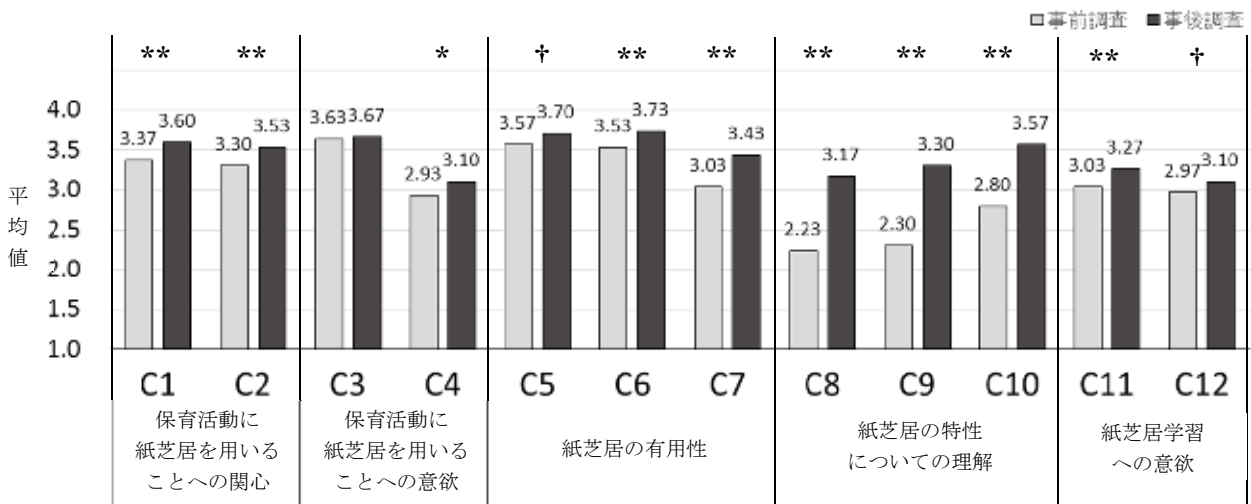


図2 第2回研修会における紙芝居に対する意識についての事前調査および事後調査結果 (N = 69)

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

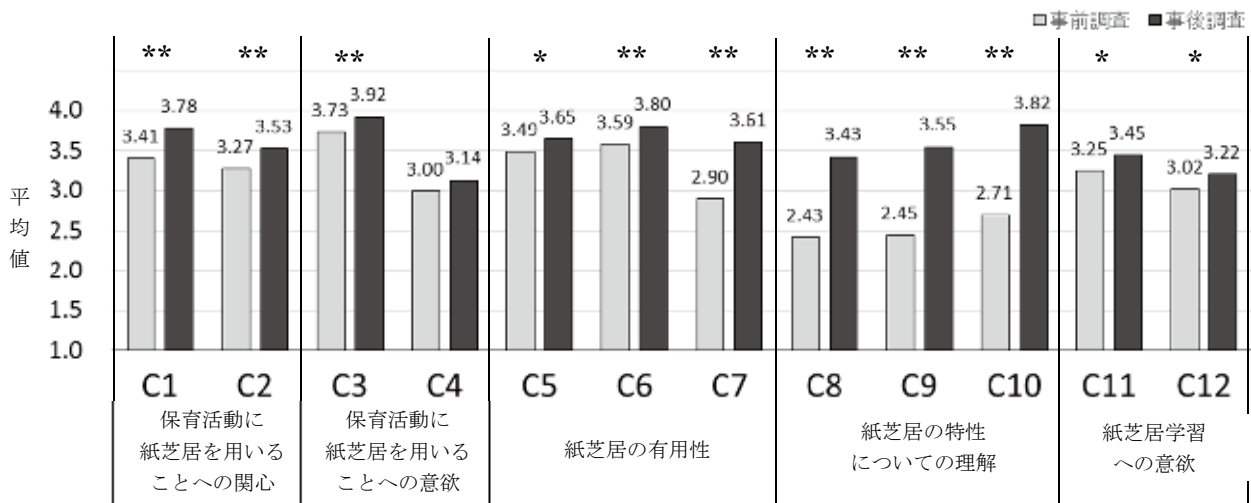


図3 第3回研修会における紙芝居に対する意識についての事前調査および事後調査結果 (N = 51)

.01)、C8 ($t(68) = 10.51, p < .01$)、C9 ($t(68) = 10.85, p < .01$)、C10 ($t(68) = 6.71, p < .01$)、C11 ($t(68) = 3.31, p < .01$) において平均値に有意な差が認められ、いずれも事前調査よりも事後調査の値が高くなった。C5 ($t(68) = 1.87, p < .10$)、C12 ($t(68) = 1.90, p < .10$) は有意傾向であり、事前調査よりも事後調査の値が高くなった。質問番号 C3 ($t(68) = 0.51, n.s.$) については平均値に有意な差は認められなかった。

第3回研修会の結果によると、質問番号 C1 ($t(50) = 4.71, p < .01$)、C2 ($t(50) = 3.06, p < .01$)、C3 ($t(50) = 2.85, p < .01$)、C5 ($t(50) = 2.22, p < .01$)、C6 ($t(50) = 2.85, p < .01$)、C7 ($t(50) = 6.45, p < .01$)、C8 ($t(50) = 9.54, p < .01$)、C9 ($t(50) = 9.18, p < .01$)、C10 ($t(50) = 9.50, p < .01$)、C11 ($t(50) = 2.11, p < .01$)、C12 ($t(50) = 2.33, p < .01$) において平均値に有意な差が認められ、いずれも事前調査よりも事後調査の値が高くなった。質問番号 C4 ($t(50) = 1.19, n.s.$) については平均値に有意な差は認められなかった。

4. 考察

4.1. 保育士による紙芝居の実践状況と特性理解の現状

表5の結果から、3回の研修会に参加した80%以上の保育士はこれまでに紙芝居を演じた経験があると答えているが、第1回研修会では80%、第2回研修会では89.9%、第3回研修会では92.29%であり、年齢層が上がると紙芝居の実演経験が上がるという傾向がみられる。B2の質問である学生時代に紙芝居の演じ方およびその特性を学んだかどうかを尋ねた質問でも同様の傾向がみられ、第1回研修会の結果によると肯定的な回答数は60%に留まっている。このことは、若い年齢層で紙芝居の演じ方およびその特性を学んでいる学生が減ってきていることを示唆する結果である。また、社会人になってから紙芝居の演じ方およびその特性を学んだかどうかを尋ねた

B3の質問結果では、研修会によって値にばらつきはあるものの50%以下の低い値となっており、学びの機会に差があることが明らかになった。

紙芝居を演じるときに舞台を使って演じたことがあるかどうかを質問したB4の結果によると、研修会によって差はあるものの、肯定的な回答は29.2%～35.6%に留まっており、勤続年数が少ない研修会で低い値となっている。一方で、保育の中で紙芝居を演じるときに舞台を使って演じているかどうかを質問したB5の結果によると、肯定的な回答は3.3%～13.0%と低い値に留まり、特に若くて経験の浅い保育士（新人保育士）は保育の中で舞台を使う機会が少ないことがわかる。この結果は、正司ら（2017）の結果と一致している。

これに対し、職場に紙芝居の舞台があるかどうかを尋ねたB6の結果では、肯定的な回答が30.9%～70.0%とばらつきが出ている。第1回研修会は埼玉県所沢市なかよしこども園主催による研修会であり職場には紙芝居の舞台が設置されているが、肯定的な回答が70%という結果から、残りの30%の保育士は職場に紙芝居の舞台があることを知らないことが推測される。すなわち、保育の中で舞台を使わない理由として、職場に舞台があることを知らない保育士と、舞台があることを知っていても使わない保育士がいる可能性がある。

紙芝居と絵本の区別について質問したB7の結果によると、肯定的な回答は60.0%～76.5%であり、正司・渡邊（2017）の結果とも一致する。今回の調査で、紙芝居と絵本を区別して使用している保育士は年齢層が上がると割合が増加することも明らかになった。小島ほか（2013）は保育者としての経験年数が上がると紙芝居にも絵本にも関心が高まり、紙芝居についても特性を活かして活用する割合が高まることを報告しており、今回の調査結果もこれを裏付けるものである。

また、保育の現場で紙芝居と絵本のどちらを選んで使用することが多いかを尋ねたB8の質問結果では、紙芝居と答えたのは8.7%～29.4%であり、絵本の方がよく用いられることが示された。この結果は、保育現場における蔵書の数とも関係

するように思われる。紙芝居の利用を増やしていくには、今後より多くの教育紙芝居が制作され、保育の現場に保有されていくことが重要であると思われる。

4.2. 研修会実施前後の紙芝居に対する認識の変化

紙芝居研修会に参加する前後で、保育士の紙芝居に対する認識がどのように変化したのかについての結果を示す図1～図3をもとに、5つのカテゴリごとに調査結果について考察する。

(1) 保育活動に紙芝居を用いることへの関心について

保育活動に紙芝居を用いることへの興味関心は、3回の研修会の事前調査においても平均値がC1(3.37～3.61)、C2(3.27～3.53)と比較的高いが、事後調査においてはC1(3.60～3.87)、C2(3.53～3.70)とさらに高まったことが分かる。紙芝居に対する関心を高めるために今回のプログラム内容での研修会は有効であると考えられる。

(2) 保育活動に紙芝居を用いることへの意欲について

紙芝居を保育に役立てたいかどうかの意欲を質問した調査結果によると、C3の事前調査において平均値が3.63～3.83ともともと高く、第1回研修会と第2回研修会では事後調査において平均値の有意な上昇は認められなかったものの、高い値を示している。第3回研修会ではC3の事後調査において平均値の有意な上昇が認められている。一方で、紙芝居を毎月のお誕生会に役立てたいかどうかを質問したC4の調査では、第2回研修会では事後調査において平均値の有意な上昇が認められたが、第1回研修会と第3回研修会では平均値の有意な上昇は認められなかった。お誕生会は園によって行事内容が決まっている場合もあり、お誕生会を想定した季節の紙芝居の実演例を紹介するなど、研修会プログラムを改良していくことも有効であると考えられる。

(3) 紙芝居の有用性について

紙芝居の有用性について質問した調査結果によ

ると、紙芝居は絵本よりも協同保育に向いていることを質問したC7については事前調査において平均値が2.90～3.03であったが、事後調査においては3.43～3.61となり、3回の研修会とも事前調査と事後調査において平均値に有意な上昇が認められた。一方で、子どもが言葉を獲得するために紙芝居は役立つかどうかを質問したC5については、事前調査では年齢層が低い第1回研修会では平均値が3.67と高く、年齢層が高い第3回研修会では3.49に留まっていたが、事後調査では3回の研修会とも平均値が3.65～3.77と高い値を示している。また子どもが言葉によって心をはぐくむために紙芝居は役立つことを質問したC6については、第2回研修会と第3回研修会において平均値の有意な上昇が認められた。第1回研修会では事前調査の平均値が3.87と高く、事後調査においては3.83となったものの高い値を保つ結果となった。これらの結果から、紙芝居の有用性を知ってもらうために今回実施した研修会は比較的効果的であったと考えられる。

(4) 紙芝居の特性についての理解について

紙芝居の形式と特性について理解していることを質問したC8、紙芝居と絵本の特性の違いについて理解していることを質問したC9、紙芝居の基本的な演じ方について学んだことを質問したC10については、いずれの研修会でも事前調査の平均値が比較的低く、C8では2.17～2.43、C9では2.10～2.45、C10では2.67～2.80であった。しかし、事後調査では平均値がC8では3.17～3.43、C9では3.30～3.55、C10では3.57～3.82と大きく上昇し、平均値に有意な差が認められた。紙芝居の特性理解を知ってもらうために、今回実施した研修会は極めて効果的であったと考えられる。

(5) 紙芝居学習への意欲について

紙芝居学習への意欲について質問したC11およびC12の調査結果によると、紙芝居の講習会への参加意欲を質問したC11についてはすべての研修会において平均値に有意な上昇が認められた。また、紙芝居の演じ方について個人的に学ん

でみたいという意欲について質問した C12 については、第 1 回研修会と第 3 回研修会は平均値に有意な上昇が認められ、第 2 回研修会では平均値の上昇が有意傾向であった。第 1 回研修会では C11 と C12 の事前事後平均値が 3.50 ～ 3.73 と高い値であったが、第 2 回研修会では 2.97 ～ 3.27、第 3 回研修会では 3.02 ～ 3.45 の値に留まっており、年齢層の低い保育士の意欲が高い傾向にあることがわかる。

保育士の紙芝居に対する意欲をさらに高めていくために、今後は個人的に紙芝居をどのように学習していくのかについて、研修会の中で取り上げていくことも効果的であると考えられる。例えば保育士が自ら紙芝居を創作して子どもたちに実演するための指導を行うことや、前徳ほか（2018）が実践したように子どもたちに紙芝居を創作させるプログラムを計画してもらうなどの方法も考えられる。今後の研修会においては、参加者の意欲を高めるような具体的なプログラムをさらに検討していきたい。

5. まとめ

年齢層や勤続年数の異なる保育士を対象とした 3 回の研修会と事前アンケート調査の結果、保育士の紙芝居実践状況と事前理解について明らかになったことは以下の通りである。

- (1) 多くの保育士は紙芝居を演じたことがあり、年齢や勤続年数が上がるとその実演割合は増える。
- (2) 学生時代に紙芝居の演じ方およびその特性について学んだ保育士は、若い保育士ほど減少する傾向にある。保育士養成校における紙芝居の授業を積極的に取り入れていくことを提言したい。
- (3) 社会人になってから紙芝居の演じ方およびその特性を学ぶ機会にはばらつきがある。現職保育士による紙芝居研修会の機会をもっと増やしていくことが望まれる。
- (4) 紙芝居を演じるときに舞台を使って演じた

ことがある保育士は 3 割程度に留まっており、保育の現場における舞台の使用は 1 割程度と少ないことが確認された。

- (5) 職場に紙芝居の舞台があるかどうかについてはばらつきがある。そもそも職場に舞台があることを知らない保育士も一定数いることが推測される。
- (6) 紙芝居と絵本の区別については、6 割～7 割の保育士が区別していると答えており、保育士の年齢が増加するとその割合も増える傾向にある。
- (7) 保育の現場では紙芝居よりも絵本を用いられることの方が多いが、職場における蔵書の数とも関係すると思われる。

また、3 回の研修会実施前後に行った紙芝居に対する認識についての調査で明らかになったことは以下の通りである。今回の調査により、研修会プログラムの効果的な点と改良点について明らかにすることができた。

- (1) 保育士の保育活動に紙芝居を用いることへの関心はもともと高いが、研修会を実施することでさらに高まる。
- (2) 保育活動に紙芝居を用いることへの意欲についてはもともと高いが、お誕生会でどのように役立てるか等について具体的なプログラムを組み込むことが課題である。
- (3) 紙芝居の有用性についてはもともと認識が高いが、研修会を実施することでさらに高まる。
- (4) 紙芝居の特性についての理解は保育士の認識は低い傾向にあるが、研修会を実施することで大きく高まる。
- (5) 紙芝居学習への意欲については、研修会に参加することで高まるが、保育士が個人的に紙芝居を学んでいく方法をプログラムに組み込むこと等が課題である。

付記

本稿は渡邊・前徳（2018）で発表した内容を発展させてその成果をまとめたものである。

謝辞

研修会のアンケートにご協力いただいた埼玉県所沢市なかよしこども園教職員の皆さん、埼玉県幼保一体化園研究会に参加された保育士の皆さんに御礼申し上げます。

ート調査を通して一、日本保育学会第71回大会発表要旨集, 1035

渡邊 裕 (埼玉東萌短期大学准教授)
前徳明子 (埼玉東萌短期大学教授)
正司顯好 (埼玉東萌短期大学教授)

引用文献

- 1) 正司顯好 (2015) 紙芝居の現状と課題, 幼児教育における可能性—埼玉県の幼稚園・保育園を中心に実施したアンケート調査に基づいて一、小池学園研究紀要, 13 : 13
- 2) まついのりこ (1998) 紙芝居・共感のよろこび. 童心社, 55-60
- 3) 大元千種 (2013) 保育現場における紙芝居の活用の課題: 保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 8 : 178

参考文献

- 鬢櫛久美子, 野崎真琴 (2010) 保育現場における紙芝居の活用状況. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 32 : 65-75
- 小島千恵子, 鬢櫛久美子, 高瀬慎二 (2013) 紙芝居に関する保育者の意識と活用状況—保育者の保育経験年数との関係から—。名古屋柳城短期大学研究紀要, 35 : 183-193
- 正司顯好, 渡邊裕 (2017) 新人保育士と保育所長の紙芝居に対する考え方とその相違に関する分析. 小池学園研究紀要, 15 : 1-9
- 野崎真琴, 小島千恵子, 鬢櫛久美子, 水落洋志 (2012) 紙芝居に関する保育者の意識と活用状況. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 34 : 87-96
- 前徳明子, 正司顯好, 渡邊裕 (2018) 教育における紙芝居の可能性を考えるⅡ. 小池学園研究紀要, 16 : 1-12
- 渡邊裕, 前徳明子 (2018) 保育現場における紙芝居の活用に関する一考察—保育士及び保育所長を対象とした紙芝居研修会の実施とアンケ